CHAPTER 5

第5章

大学と地域防災

第１節　学生ボランティアと協働する防災の取り組み
―地域特性を盛り込んだ KUG の作成をつうじて―

小林　貴徳（専修大学　国際コミュニケーション学部）

1 はじめに

千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム（以下、千代田キャンパスコンソと略記）の共同研究として、2021 年度より「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究」が始まった。2022 年度には「(2) 職員及び学生を対象とした帰宅困難者支援施設運営ゲーム（KUG）の開発」を副題に、また、2023 年度には「(3) 地域連携を視野に入れた帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発」を副題として、年度ごとに新たなテーマを据えて発展してきた。その 3 年間にわたる研究成果は明白であり、千代田キャンパスコンソに参加する 5 大学では、KUG 作成をはじめ、各大学で独自の取り組みが公表されている [1]。

そんななか、2023 年 11 月に千代田キャンパスコンソに加盟した専修大学では、2024 年度の「大規模災害時における学生ボランティアの育成とネットワーク化に関する研究」事業を進めるにあたり、専修大学版 KUG の作成および実施を優先課題としつつ、学生ボランティアの活動推進・ネットワーク化に取り組むこととした。本報告書では、専修大学版 KUG の作成経緯と盛り込まれた工夫、および実施によって明らかになった課題と展望を示してみたい。

2 学生ボランティアとの連携

専修大学には、神田キャンパスに「専修神田ボランティア（SKV)」、生田キャンパスに「専修生田ボランティア（SIV)」という学生ボランティア団体が組織されている。いずれも学生部に設置された『専修大学ボランティア推進委員会』の学生委員として組織されており、メンバーは、全員が「災害救援ボランティア講座」を受講し、上級救命技能認定セーフティーリーダー認定証の資格を持っている。両団体とも、正しい知識を持ったうえで、要請のあった災害ボランティア活動への協力や、それぞれのキャンパスが位置する近隣地域において啓発活動を行っている。

2010 年 11 月に創設された SKV は、2024 年現在で約 70 名の学生が所属しており、「災害時、学内と学外から被害を減らす」を活動目標としつつ、日ごろから「防災・救命」と「地域貢献」に取り組んでいる。本学では 2024 年度「大規模災害時における学生ボランティアの育成とネットワーク化に関する研究」事業を SKV との連携のもと進めることとした。

3 専修大学版帰宅困難者支援施設運営ゲーム（KUG）の特徴

---

[1] 千代田区ウェブページ「千代田学」調査・研究実績報告書を参照。
https://www.city.chiyoda.lg.jp/koho/kurashi/volunteer/tean-ichiran.html

2024 年度の始まりとともに、SKV の幹部学生とのあいだでミーティングを繰り返し、KUG 作成のロードマップを協議した。SKV は日ごろの活動のなかで、静岡県が開発した防災図上訓練「避難所運営ゲーム(HUG)」の実施経験を有していたため、KUG の概要や進め方に関する意識の共有は極めてスムーズに進められた。むしろ、かねてより SKV 側で構想が練られていた「専修大学版」作成のためのアイデアが出された。専修大学版のための具体的な提案は以下のとおりである。

① 帰宅困難者カードの改編・追加（**図 5.1.1**、**図 5.1.2** 参照）

（昼夜間人口の差が激しい千代田区の特性を考慮し、昼夜で異なるバージョンを作成）

帰宅困難者カード（昼：260 枚、夜：190 枚）、

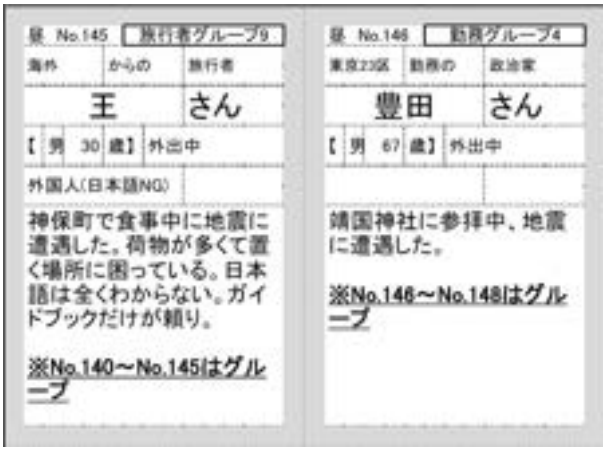

図 5.1.1　帰宅困難者カード（昼間）の一例

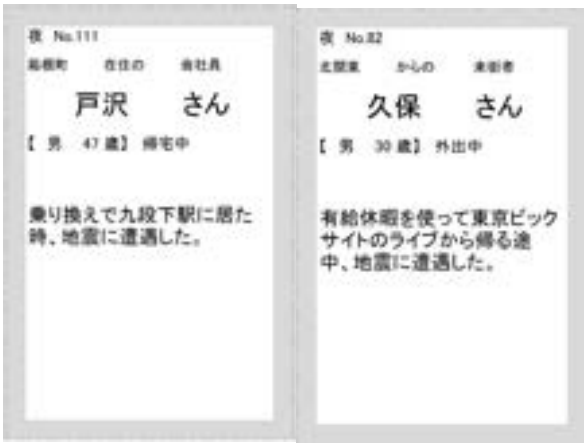

図 5.1.2　帰宅困難者カード（夜間）の一例

②イベントカードの改編・追加（**図 5.1.3** 参照）

（昼夜間で異なるイベント発生を想定）

イベントカード（昼：105 枚、夜：70 枚）

図 5.1.3　イベントカード（昼間・夜間）の一例

③「アクションコスト機能」ルールの追加（図 5.1.4 参照）

（帰宅困難者一時受入施設で、ボランティアを割り振ることの疑似体験）

COP コマ（80 枚）

図 5.1. 4　アクションコスト機能の COP（Cost Of People）カード

④帰宅困難者およびイベントカードに「必要とするボランティア人員」の数値を記載

（図 5.1.5 参照）

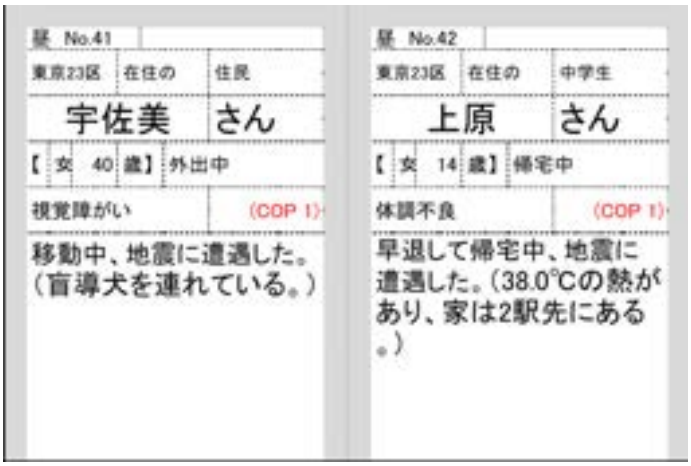

図 5.1.5　アクションコスト（COP）つき帰宅困難者カードの一例

SKV による提案は、神田キャンパスで学ぶ学生の目線による気づきが反映された内容となっている。日常の通学やアルバイト経験などで、ありふれた景観として見逃しがちな光景、埋もれがちな情報にフォーカスし、道行く人、時間帯の違いによる人の属性の違いがリストアップされた。また、神保町・九段下エリアで起こりうるイベントについても、学生の想像力が発揮され、リアリティとともに、ユニークさが込められている。ここで重要なのは、学生間でアイデアを出し合い、話し合い、検討を重ねて提案するというプロセスである。いつ、だれが、どのように、なにが発生しうるのか、というイメージのプロセスである。

さらに、SKV では、これまでの防災訓練の経験に基づき、帰宅困難者のサポートやイベントへの対応に割くことができるボランティアの数が有限であることが強く意識されている。帰宅困難者支援施設運営ゲームにリアリティを加味し、ゲーム参加者に危機感を憶えさせるルールの追加が施された。とはいえ、アクションコスト機能の追加は、初めて KUG に参加する人にとっては

やや理解が追い付かない可能性があるということで、アクションコスト機能なしでも実施できるよう作成された。

SKV では、廣井悠先生（東京大学）が作成された KUG に基づきつつ、支援施設を専修大学に設定した版に S-KUG（専修大学版帰宅困難者支援施設運営ゲーム）との名称をつけ、ゲーム実施のための取扱説明書、およびスライド資料を作成した（**図 5.1.6**、**図 5.1.7** 参照）。

図 5.1. 6 S-KUG の説明書（pdf）

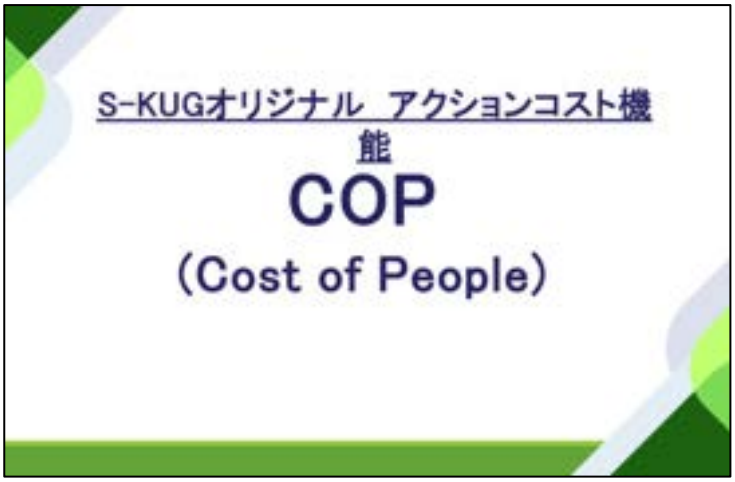

図 5.1.7 S-KUG（COP 機能付き）の説明ファイル（ppt）

4 S-KUG の実施とふりかえり

SKV では、避難所運営ゲーム(HUG)の経験があったものの、KUG は初めての取り組みであった。そのため、2024 年 8 月に法政大学で実施された「大規模自然災害発生時の大学キャンパスでの避難生活のマネジメント I」での KUG に参加した。KUG の体験だけではなく、大学間の学生ネットワークづくりの機会となった。

S-KUG の完成・納品後、2024 年 12 月 21 日には SKV メンバー27 名が参加する KUG が実施された。SKV が作成したマニュアルの有無による効果の差、ならびにアクションコスト機能の有無による運営効率の差を測定するため、以下の 5 つのグループに分けられた。

グループ A『SKV 作成 有事の際のマニュアル』無し／『COP』 無し
グループ B『SKV 作成 有事の際のマニュアル』無し／『COP』有り
グループ C『SKV 作成 有事の際のマニュアル』無し／『COP』有り
グループ D『SKV 作成 有事の際のマニュアル』有り／『COP』無し
グループ E『SKV 作成 有事の際のマニュアル』有り、『COP』 有り

S-KUG の制作に携わった SKV メンバーを中心として、90 分の限られた時間のなかで KUG はスムーズに展開され、その後、発生した問題や課題をふりかえるディスカッションの場が設けら

れた（写真１～５参照）。参加したメンバーからは、S-KUG を体験して学びになったこととして、以下のようなコメントが寄せられた。

・実際に校舎の造りを思い出しながら人を配置しイベントに対応していくことで、『どんなときでも災害は起こるんだ』という臨場感のようなものが感じられ、自分がどうすべきなのか、普段にも増して頭を回転させながらゲームに取り組むことができた。
・イメージ力が大事だと感じた。今回は机上だったがいずれ体を使い体験できるように取り組みを続けていく必要があるなと思った。
・災害が起こるとどんなことが要されるのかを『見える化』させることができた。
・避難してきた人をどの基準で受け入れるのかという判断を、短時間で行うことの難しさを学んだ。それと同時に、受付の人数をしっかり確保することが求められると思った。
・判断が難しい時、それに悩んでいると次の案件がすぐに舞い込んでくるため、状況が余計に悪くなるということを感じた。
・外国の方が来たらどうするか、迷わずに『こうするのだ』と誰も答えられないのではいけないので、これから考えないといけないと感じた。
・専修大学版の KUG ということで、災害時には観光客や学生、会社員など多くの帰宅困難者が大学に避難してくることを想定することができた。
・ボランティアの人数が多い方が精神的に余裕を持てた。非日常だからこそ冷静な判断が必要だと思った。

参加した学生からは、「思い出しながら」「イメージ力」という言葉が聞かれたが、ふだん何気なく過ごしている校舎内が一時避難場所になった際、どのような空間として活用できるか、あるいは、どのような問題が生じるのか、という気づく点が多かったことが読み取れる。他方で、以下に示すように S-KUG の改善点も出され、この取り組みが学年をまたぎ今後発展することが感じられた。

・実際に発生した際に同じような境遇の人が 1 人とは限らず、10 グループくらいで来る可能性もあるため、カードの内容と枚数を見直すといいのではないか。
・配置するカードが細々していてプレイ中の管理が難しい。
・どのような判断基準で、教室を振り分けるかなどを事前に決めておくと、実際運営する際にスムーズにいくと思いました。
・教室をより多く解放をしてほしい。B1 と B3 だけでは事情がある人を受け入れきれず、追い返すことになってしまった。
・人以外の物資で何がどれくらいある等の他の状況が具体的になるものがあるとより想定しやすいと思った。
・コマが小さすぎて紛失する危険性があったので、全体的にもう少し大きめにして欲しい。
・他の教室が空いてるのに使わないのがもったいないと思った。

写真 5.1.1 S-KUG のマニュアル確認

写真 5.1.2 S-KUG の実施

写真 5.1.3 帰宅困難者カード

写真 5.1.4 帰宅困難者の割り振り

写真 5.1.5 各グループによる KUG 実施のふりかえり

5 おわりに

本学では、2024 年度の「大規模災害時における学生ボランティアの育成とネットワーク化に関する研究」事業を専修神田ボランティア（SKV）と連携して進めた。本学の場合、神田キャンパスの SKV、生田キャンパスの SIV という、創設から 10 年以上にわたり防災啓発や災害支援の活動に積極的に取り組んでいる学生団体が存在している。これは本学における教育と地域社会貢献の成果であり、さらに発展が期待される重要な資源といえる。そうした背景を有する学生団体であるからこそ、学生の声に耳を傾ける必要がある。というのも、今回の S-KUG の制作および実施といった一連の取り組みをつうじて、学生から大学側により良くするための 3 つの要望が寄せられたことを付記しておきたい。

① 使用教室・使用号館の拡充

大学が設定している「帰宅困難者等一時受入施設」では、じっさいに帰宅困難者を受け入れる際に十分な対応が取れない可能性がある。寝泊まりすることも想定される避難者のパーソナルスペースを確保するためにも、耐震構造が整っている他の建物についても帰宅困難者の受け入れ施設としての開放を検討していただきたい。

② 受入教室の詳細な区分け

帰宅困難者の受入教室のみ決まっており教室の区分け、男女の使用教室の区分けや受付場所、救護所など設置すべきものの場所が決まっていない。個々の多様性やプライバシーが確保されなければならない現代にあって、帰宅困難者一時受入施設においても事前に検討しておいていただきたい。

③ 職員の動きや物資の配置場所、数などの『見える化』

有事の際には大学の職員の方々と共に施設運営に従事することになっていますし、施設運営には一般学生の協力も不可欠です。現在のところ、職員の方々や一般学生がどのように避難・行動していくかを記されたものが大学全体に共有されていないように思います。施設運営を円滑に行うためにも、職員の方々や一般学生を含めた行動指針や、物資の配置場所・数など、受入施設の運営に付随する必要情報の共有を検討していただきたい。

大学間のネットワーク構築と強化を実現するためにも、まずは大学と学生の信頼関係の構築を進める必要があるだろう。もちろん立場の違いがあるため、すべての要望に対して、求められる対応が十分に叶えられるとは限らない。とはいえ、学生と教職員が膝をつつき合わせ、意見を交換し、実現可能な対応を協議していく姿勢が重要である。おそらく、その延長線上には、千代田大学コンソが掲げる、大学間の学生ボランティアの育成とネットワーク化の地平が拓いているはずである。

第２節　大学の学びと地域防災を考える―パネルディスカッション報告―

小林　貴徳（専修大学　国際コミュニケーション学部）

1 はじめに

専修大学では、「大学の学びと地域防災」をテーマとしたシンポジウムを、令和６年 12 月 21 日(土)に開催した。神田キャンパス５号館を会場としたシンポジウムは、東京大学先端科学技術研究センター教授の廣井悠氏と、工学院大学建築学部教授の村上正浩氏を講師にお招きし、第一部の講演と第二部のパネルディスカッションで構成された。

図 5.2.1　「大学の学びと地域防災」ポスター

専修大学ネットワーク情報学部教授の佐藤慶一氏が司会を務めた第一部では、「大学の学びと地域防災－帰宅困難者対策と KUG－」と題する講演で廣井氏は、巨大災害発生後に生じる交通渋滞のシミュレーションに基づき、帰宅希望者をいかに「滞留」させるのかの重要性を説いた。そのうえで、「滞留」させるための図上訓練である「帰宅困難者支援施設運営ゲーム（KUG)」の意図や利点について、その開発背景に触れつつ解説した。他方、村上氏による「新宿駅周辺地域の防災の取組」では、新宿駅周辺での地域全体で地震防災対策、また、震災時の混乱防止と都市機能維持のための取り組みについて詳細な事例が紹介された。地域連携による防災活動の拠点としての大学

の役割、また、教育訓練プログラムを通じた地域連携の仕組みづくりとひとづくりの重要性が示された。

図 5.2.2 廣井氏の講演

図 5.2.3 村上氏の講演

こうした講演内容を踏まえて臨んだパネルディスカッションでは、第一部で登壇した 3 名の専門家に、専修大学神田キャンパスの学生ボランティア団体「専修神田ボランティア（SKV)」の学生 2 名をくわえ、大学の学びと地域防災に関する意見交換を実施した。

2 パネルディスカッション「大学の学びと地域防災」

〈パネリスト〉
- ●**廣井 悠**（東京大学先端科学技術研究センター）
- ▲**村上 正浩**（工学院大学建築学部）
- ◆**佐藤 慶一**（専修大学ネットワーク情報学部）
- ★**山﨑 恭稜**（SKV 所属学生、法学部 4 年生）
- ☆**江波戸 拓哉**（SKV 所属学生、法学部 4 年生）

〈ファシリテーター〉
- ✤**小林 貴徳**（専修大学国際コミュニケーション学部）

✤**小林**　それではパネルディスカッションを始めます。わたしは、本パネルのファシリテーターを務める専修大学国際コミュニケーション学部の小林です。どうぞよろしくお願いします。

本パネルは、日ごろから防災に関するさまざまな活動を進めているグループ「専修神田ボランティア（SKV)」の学生と、専門家の先生方のあいだで意見を交換し、防災をめぐって、大学と社会との関係や大学教育に新たな展望を見出すことをねらいとします。ディスカッションを始めるにあたり、SKV の活動について、山﨑さんから少し説明をいただけますか。

★SKV 山﨑　SKV の山﨑と申します。わたしのほうから簡潔に SKV の紹介をさせていただきます。SKV は、2010 年に実施された災害救援ボランティア講座を受講した有志学生の集まりがはじまりでした。その翌年に発生した東日本大震災では、神田キャンパスに一時避難してきた方々に対し、大学の職員と有志団体の学生が協力して運営にあたりました。その経験が元となり、専修大学ボランティア推進委員会の傘下団体として現在にいたっています。いまでは、SKV に所属する全メンバーが災害救援ボランティア講座を受講するなど、防災知識の向上や普及を目指す活動に取り組んでいます。

☆SKV 江波戸　同じく SKV の江波戸と申します。私からは、都市で働くうえでの防災意識の向上について、廣井先生と村上先生にお聞きしたいと思います。というのは、わたしは来春から不動産系の仕事に就きます。都市で働くことになりますが、一社員が社内の防災意識を向上させるためには、どのような働きかけをしたらよいのかと頭を悩ませています。お答えいただけますでしょうか。

写真 5.2.1 パネルディスカッションの様子

▲村上　答えていいですか。まず一つはトップの意識、やはり上の方の意識の部分が大きいと思います。ただ社員にもやらないといけないことがありますので、それぞれ自分たちのメリットになるようなことをしてあげる必要があるかと思います。社員がなにかの取り組みを実施したのであれば、それをちゃんと評価する仕組みというのも必要かなと思います。

●廣井　私も村上先生と同じなんですが、やはり企業の中の防災、企業防災や事業所防災というのはトップの意識がすごく重要なんです。まず一番簡単なのは、自分が偉くなることです（笑）。そうすれば、20 年後に防災にとても強い会社になると思います。とはいえ、それはなかなか時間がかかるので、まずは社長とか取締役とか偉い人を説得することがとても重要になります。なぜトップが防災を知らなければいけないかという点はいろいろなエビデンスがあります。たとえば、私は

官僚の人と接する機会が多いのですが、よく聞くのが、大臣になると一番最初に官僚にレクチャーされるのが危機管理なんです。つまり、トップは危機管理や防災の対応をきちんとできないとダメだということです。そこをきちんと伝えて、やっぱりトップこそ防災に関して詳しくなってくださいというふうに伝えつつ説得することです。最近、各自治体ではトップセミナーという、社長や取締役みたいに偉い人を説得するセミナーを開催していますので、そういうものに招待するというのがとても重要なんじゃないかなと思います。

✤小林　今回のシンポジウムは、「大学の学びと地域防災」というテーマを設定しています。さきほどの廣井先生と村上先生のご講演に共通していたのが「イメージ力」という言葉でした。つまり、普段の生活でわれわれがどこまでそのイメージ力を蓄積、あるいは強化できるのかということでした。例えば、地震で揺れている最中に、帰宅が困難になることを想定してホテルの予約を試みるだとか、火災が発生しないのであれば、屋外に逃げるのではなく学内に留まっていた方が安全なんだという、イメージする力です。その力を鍛える訓練といえると思いますが、廣井先生が開発された「帰宅困難者支援施設運営ゲーム（KUG)」の専修大学バージョンを制作するにあたり、SKV のみなさんはどういった工夫を盛り込んだのでしょうか。

★SKV 山﨑　廣井先生が考案してくださったKUGをもとに、S-KUGと名付けた専修大学版KUGを制作しました。S-KUG の特徴について少し説明いたします。私たち SKV は日頃の訓練として防災知識の向上を図っているのですが、その知識をもとに千代田区に特化した「帰宅困難者カード」を作ろうということになりました。オリジナル版では地域住民の方もカードに盛り込まれていますが、千代田区では、住民の方は在宅での避難や避難所への避難となっています。そこで、S-KUG では、地域住民というよりも、会社員であったり、神保町駅や九段下駅を利用している人であったり、このエリアの日常を反映させてカードを作りました。

もう一つのポイントは、朝と夜の二つのバージョンのカードを作った点です。千代田区の WEB サイトによると、千代田区では昼夜人口の差が約 84 万人あります。朝と夜の二つのバージョンの帰宅困難者カードを作って、ゲームでそれぞれに対応できるようにした点が特徴であると考えています。

✤小林　みなさんが普段学ぶ大学が位置する千代田区、日常的に見ている、眺めているこの景観、それを KUG に盛り込んでみたらどうかという、そういった工夫ですね。この点について廣井先生のご意見を伺えますか。

●廣井　私は KUG の素材をパッケージとして WEB サイトに掲載していますが、そこには「ぜひ自分の会社の地域特性とか企業特性に合わせてください」というふうに書いています。実際、大阪市でも大阪市バージョンを作るとか、 京都市も京都市バージョンを作るとか、あと北の方では札幌の時計台ビルを対象としたビルバージョンみたいな取り組みをやっていただいています。そして、多くの方々が「バージョンを作るのは作った」とおっしゃります。結果として、S-KUG ができたとか、大阪市バージョンができたと。ただ、完成した制作物そのものに意味があるというより

も、その制作のプロセスに大きな意義があるんですね。要するに、こういうものって、何が起きるだろう、自分の地域ではどういう状況があるだろうということをイメージしないと作れないのです。自分たちのオリジナルバージョンを作ったという結果よりも、むしろ、そのプロセスをみんなで共有して、何が起こるかということを考え抜いた結果で S-KUG ができたと思います。これが重要。ぜひ、その部分をきちんと経験として次の世代につなげていただきたいと思います。とてもいい取り組みです。とくに、昼夜のふたつのバージョンは千代田区の一番の特徴ですよね。昼夜人口の差が激しく違うというのはとても重要です。たぶん新宿ほど飲み屋から出てくるめんどくさい人、酔っ払いとかいないかもしれませんけど、それなりに対応の難しい人もいるはずです。そういう夜間にどう対応できるかを考えるって、地域特性を理解するという意味でも、実はとても重要だと思います。

写真 5.2.2 廣井 悠氏

✤小林　ちなみにいま話に出ましたけども、新宿区の場合、千代田区の場合、渋谷区の場合など地域ごとに特徴が異なるかと思います。村上先生は、長年、新宿区で防災の取り組みを進められていらっしゃいますが、この部分はとくに注意すべきだといった点について教えていただけますか。

▲村上　はい。やはり新宿区は昼夜間で違いがあります。例えば、歌舞伎町では東口の方に行くと、特に若い人たちが昼よりも夜に多かったりもします。そして昼夜間で人の属性が大きく異なります。さらに、新宿駅を核にして多くの人たちが動いているので、電車が停まった場合、一日あたりざっと 360 万人が利用している新宿駅では、移動している人びとへの対応というのがポイントになると思います。

あとは最近の観光客です。インバウンドの影響は、新宿駅に行かれるとわかると思いますが、本当に多くて、そういう観光客に対してどう対応するかということを含めて考えなければなりません。いまちょうど駅は工事中ですが、表示やサインがわからなかったりします。工事中ですので人の受け入れも十分にできません。その点は問題を抱えていると考えています。

✤小林　なるほど。工事であるとか、数年前の新型コロナウイルスの感染症拡大の状況であるとか、その都度状況が変わっている、しかし災害はいつ起こるかわからないというわけですね。佐藤先生はこれまで、表参道や原宿での防災プロジェクトに取り組まれてきました。そうした密集エリアの特性について教えていただけますか。

◆佐藤　7 年か 8 年前に大学の先輩が表参道の商店街で防災のレクチャーをしていて、あるとき、今日のように廣井先生と村上先生をお呼びして勉強したことがありました。そのときも盛り上が

って商店街の人たちと何かしようということになったのですが、当時も議論になったのは、外国人の訪問者がすごく多いという点です。当時、キディランドの売り上げの6割が中国人だと言ってたように記憶しています。それが7年か8年前なのでいまはもっと増えていると思います。

写真 5.2.3 佐藤 慶一氏（左から一人目）

東日本大震災のとき、商店街では電車で来た人の数をカウントしていましたが、どうも6万人ぐらいが表参道にいたようです。そして電車止まってしまい帰れなくなった人がでた。あの辺りは青山学院大学があるので、キリスト教の精神ですばらしくて、すぐ大学を開放し、正式な数は覚えていませんが、1万人近くの人を受け入れたと聞きました。やはり地元の人はよく知っていて、青山学院大学は災害のとき受け入れてくれたとか、そういう記憶があるようです。

参考になるかなと思って持ってきた、7年くらい前に作ったこの防災マップを少し紹介します。外国人や遊びに来ている人が多いということで、電車が止まって帰れなくなるよ、どうする？ということを、どのように伝えるのか考えて作りました。うちの学部はグラフィックデザインの先生もいますので相談し、こういう漫画にしようということになりました。それから英語も入れようとか、ということでこんなマップを制作したわけです（**図 5.2.1** 参照）。

当時を思い出すと、原宿のあたりで就職活動中に地震に遭ってしまった学生がいました。ファミリーレストランにいたようですが、巨大なエアコンが落ちてきたらしいです。震度5強レベルだったかと思いますが、それでとっさに隠れたらしいんですけど、その直後にエアコンがドカンと落ちてきて、もしかしたら死んでたかもしれないって話を聞きました。そんなエピソードにもとづき、この漫画のキャラクターの頭にポコッとなんか落ちてくるところを描きました。そのほかにも、みんなで助け合いましょうということを描いています。

裏側には地図があります。渋谷区にも防災地図がありましたが、地元民が行く避難場所も、帰宅困難者支援施設も示されていて、それでどっちに行ったらいいかわかんない、となるわけです。実際に行ってみると「来ちゃダメですよ」って書いてあったりするわけです。非常に難しい地図だったので、それならばということで帰宅困難の人だけの地図にすると、そしたら空白だらけになったんです。じつはこの後、地区では協議会ができて話が進んでいきました。もっとたくさんこういう施設を増やしたいねっていう話になりました。先ほど村上先生のお話にあったように、みんながなかなか協力してくれるわけではないので、実際は思うように対策に進展がないのが実情です。

大学で取り組めることというのは、こんな地図を作ってみたり、訓練もそうですけど、情報を調べて皆さんにお伝えするということがあります。このエリアだと、やはり地域特性というか、会社員とか、古本を買いに来ている人もいるし、そういう人たちに対して情報提供をしていくという活動もあり得ると思います。

図 5.2.1 Bosai Manga Map（表参道・原宿・竹下）の表紙と漫画の一部

✤小林　ありがとうございます。じつはいまお話しいただいた防災マップは、先日おこなったミーティングでお聞きしたものでした。ぜひともデータの共有をとお願いしたところ、本日は貴重な在庫をご提供くださったという経緯があります。

◆佐藤　この防災マップはたしか相当な量を刷りました。それで店舗に置いたり、観光協会に置いたりしたのですがさすがに全部なくなってしまいました。今日は研究室にあった残りを持ってきました。貴重なやつです。もうないです。

✤小林　ありがとうございます。実際いま話題にあがったように、いざ地図に落とし込んでみて気づいた空白地とか、要するに可視化することで明らかになる問題というのがあると思います。そういった意味では、今回 SKV の学生が千代田区の特性について盛り込んでみようとして帰宅困難者カードを作りましたが、その時に、改めてこんなこともあったんだという気づきがあったら教えていただけますか。

★SKV 山﨑　気づきとしては、駅が近くにあるということと会社員が多いということです。カードを作る最初の段階で、どんな人がいるか SKV メンバーに挙げてもらいましたが、やはり会社員という答えが多かったです。犬の散歩をしている人という意見もありましたが、地元住民というのは少なく、昼間人口、通勤者が多いエリアだ地域だという地域特性を改めて実感しました。

✤小林　昨今のインバウンドの回復という状況のなかで多言語化や多文化化という側面もあるかと思います。そのあたり、たとえば大学で外国語や異文化など学ぶうえで、どのような対応ができるだろうとか、どのように知識を活用できるだろうなど、そういった話はありましたか。

★SKV 山﨑　カードを作る時点で、日本語を話せない外国人観光客というのを盛り込みました。そして、その場合に私はそれにどうやって対応していくのだろうか考えました。たしかに携帯電話を使うことができれば、翻訳アプリなどでいろいろな言語に対応できるのかもしれないですが、携帯電話がいつまでも使えるとは限りません。この点については今後の課題の一つに考えています。

✤小林　本日のシンポジウムは「大学の学びと地域防災」をテーマとしています。そこで、廣井先生、村上先生、佐藤先生に伺います。これまでいくつも具体的な実践に取り組んでこられたなかで、地域防災に関する大学の役割というのは人材育成なのか、あるいは一時滞在施設なのか、そのあたりについて、今後の展望も含めてお話しいただけますか。

●廣井　はい。2つあると思っています。ひとつは、災害時を考えることで、地域内のつながりができるという点です。先ほど村上先生のお話もありましたように、災害時にはいやでも企業と大学が連携しなければならなくなります。そうしないと回らないのです。ただし、平時に企業と大学の連携ってなかなかできないわけですよ。事業者と大学が事前につながっている必要がある、つなぐ必要があると分かっていても、事業者も大学も忙しくてなかなかつなぐことができない。そこでやはり学生ってすごく重要なんですよね。学生ってもう、特権階級みたいなもので、学生のためだったら、わりとみんな協力するんです。私みたいなおじさんがですね、どっかの企業に行って「教えてください」って言ってもたぶん教えてくれないんだけど、「大学の研究ゼミです」あるいは「卒論です」って教えてくださいって言ったら、じゃあここの部分はさすがにマスキングしてほしいけど、教えてあげるよ、と。未来のためにいろんな企業が協力してくれる。みんなが相手にしてくれるという、学生さんのいわゆる特権をぜひ活かしていただいて、そうした、企業と大学をつなげる一つのハブになっていただきたいと思います。

もうひとつは、ぜひ外国人の方を呼び込んでいただきたいという点です。やはり大学って留学生が結構いらっしゃいますよね。多様な人材が揃っているということが大学の強みなんです。外国の方って防災にとって重要になります。なぜ重要かというと、これは都市計画の話になりますが、アメリカのトロント大学のリチャード・フロリダという研究者がある研究をしていました。イノベーションが起きている都市というのは、いわゆる多様性に富んでいる都市だという研究です。外国人が活躍していたりとか、芸術家がいたりとか、LGBT の人がいたりとか、そういう人たちを受け入れる寛容な都市は、実はイノベーションが起きやすいと言われています。防災ってじつはあまりイノベーションが起きません。というのも、災害が起きないと改めて問題を考えるということをしないので、防災の世界って全然イノベーションが起きないのです。20 年前の訓練と同じ訓練をしている地域がいっぱいあるほどです。そこに大学ならではの、千代田区ならではのイノベーションをうまく起こす。正しい取り組みや効果の高い取り組みをするために積極的にイノベーションを起こす。そうすると、やはりいろんな見方をする人、例えば、芸術家肌の人とか、外国人とか、あるいは若い人、女性、教職員も含めるといろんな人がいます。大学というのはそういう人材が揃って

いる場です。だからその大学の強みを生かすためには、皆さんの組織のなかにいろんな多様な人を入れ込み、この問題をどう考えるかということを再考してほしいと思います。そうすると、なにか新しいイノベーションに結びつくようなアイディアが出てきて、そして、一歩前に進むことができると思います。そこが大学の強みのふたつ目だと思うんです。それをぜひとも実行してほしいと思いますね。

▲村上　私も同じ考えです。避難所の取り組みをやっていて、やはり多様性というのは非常に重要だと感じます。そうしたこともあって、私はいま手話を習っていますが、いろんな方の立場から考えないと避難所の環境は良くならないと思います。目が不自由な方に参加してもらわないと、目が見えている人だけで考えても、決して目が不自由な方のことはわからない。避難所の利用計画を考えるときに、たとえばトイレの近くに目が不自由な方の部屋を配置したほうが良いと思われるかもしれません。ところが、目の不自由な方に言われたのが、私は点字ブロックがないからトイレに行けないということです。先ほど廣井先生がおっしゃられたように、多様な視点の必要性を感じます。LGBT の方の視点で見ないとわからないこともあります。多様な方がいるのが大学だと思いますし、ぜひとも進めていっていただきたいです。

写真 5.2.4 村上 正浩氏

本学も新宿に位置していますので、地域防災拠点としての役割を果たしていこうとトップダウンで取り組んできました。「ものづくり」「ひとづくり」「ことづくり」と言いますけど、やはりそれをできるのは大学なのです。専修大学もこの場所にあって、学生さんがいるからこそできることがたくさんあるはずです。教員だけでは絶対できないです。

◆佐藤　今日は SKV の皆さんがこうやって集まり、訓練をやっていて本当に素晴らしいと思います。企業の人だけの難しい会議とは異なり、やはり学生がいると雰囲気が違う。未来のために頑張ってやろうという感じになるので、学生の存在は地域にとってとても重要だと思います。それから学びという点でいうと、防災のことはなにも特別なことではなく、自分がいま勉強していることと関係すると思います。神田キャンパスの場合、法学部だと法律とか、商学部であればビジネスとか、あるいは国際コミュニケーション学部だと多文化間の交流とかと結びつきます。ふだん勉強している中でも「あ、これは災害と関係しているな」のように学びにつなげたり、あるいは学んだことをまた防災の活動につなげたりできるでしょう。そのようにできると、より活動の中身が出てきますし、いやらしい話、就職活動でもうまく活かされるのではないかと思います。

✤小林　いまの話で「つなぐ」「結びつける」といった重要なキーワードが出たように思います。また、多様性を受け入れる機会をどれだけ作り上げていくかという点において大学が非常に重要な拠点となるというご指摘がありました。これについて、例えば、学生の立場から、学生の視点か

ら、あるいは、来春には社会人としての立場から、山﨑さんと江波戸さんはどのように感じ、どのようにご自身と結びつけますか。

★SKV 山﨑　大学の役割に関して言えば、私たちの SKV としても、今後、提案できることや関わることは大いにあると思います。そのなかで、また新たな視点で活動に活かしていくこともできるように考えます。私は、来年からは社会人ということで、ホームセンターに就職するのですが、ホームセンターという場所は、災害発生時に必要となるものが多く揃っているところです。今日のお話というのは、そういった事態での対応について強く考えさせられました。

☆SKV 江波戸　つながりという言葉で私が感じたのは、やはり専修大学で完結するのではなく、もっと他の大学の学生との交流が必要だと思います。大学生活は残り 3 ヶ月しかありませんが、他の大学の方々と一緒になって防災知識の向上に取り組むことができる場があればよいと考えます。

✤小林　本日はちょうど千代田学事業の全体代表者である東京家政学院大学の酒井先生も会場にいらっしゃっていますけれども、この千代田学事業のテーマは「大規模災害時における学生ボランティアの育成とネットワーク化」です。まさにいま江波戸さんが言及されたとおり、学内の結束強化も良いのだけれども、大学間での結びつきを構築できるかどうか、これが大きな課題かと思います。その点について先生方に質問したいのですが、学内だけでもなかなか難しいのに、大学間での連携、大学と企業の間での連携となったとき、どういった問題があるでしょうか。

▲村上　私は、東北福祉大学・神戸学院大学・工学院大学による「TKK 3 大学連携プロジェクト」を 2009 年から取り組んでいます。この取り組みは、広域での大学間連携によって防災・減災を中心とした学生の社会貢献教育を行うことが目的です。現在も継続しておりますが、たとえば 2009 年の開始当初からオンラインで学生に授業を遠隔配信するなどしてきました。そうした学生は、所属の大学でやってない授業を受講することができます。たとえば、本学には社会貢献や国際協力といった授業がありませんので、そうした授業を 2 大学から配信してもらって本学の学生が受講しています。

東日本大震災が発生した当時も、3 大学の連携で学生たちはボランティア活動に臨みました。とくに、津波にのまれ汚れている写真の修復プロジェクトは大きな意味を持つものでした。東北福祉大学は被災した大学なので、現地の学生ボランティアを通じていろいろなニーズを拾い上げてもらい、離れている遠隔の大学で後方支援をしていくというやりかたです。写真を洗うという作業だとたいへんなので、全点をデジタル化しました。とくに建築の学生はフォトショップなどのソフトを使い慣れているので、デジタル処理をして写真を修復するという取り組みを、工学院大学と神戸学院大学で分担して進めました。

このような取り組みは一つの大学ではできないことでした。互いの強いところを活かす、文系と理系の融合のなかで互いの強いところを活かしていくことが有効であると経験から学びました。3 大学が離れているために同時に被災することは考えにくく、どこかの大学が被災したときに支援することもできます。たとえば、東日本大震災が発生したときも、私たちもすぐに東北福祉大学

に支援に入りました。普段から使っていた遠隔のシステムを、直後に神戸学院大学とつないで支援体制を確認し、すぐに東北福祉大学に支援に入りました。

こうしたことができるのは、やはり大学間が互いに連携するメリットだと言えます。学生ボランティアについても、理系の本学の学生にはほとんどノウハウはありませんでした。ところが、互いに勉強していくことでそのノウハウを学びました。他方で、建築の学生がなにも泥かきをする必要はなく、これぞれの専門性を活かせることをすればよいと思っています。建築の学生であれば、普段から段ボールなどで模型を作り慣れているので、避難所の環境改善のために、その場で実測して段ボールをカットし、仕切りやテーブルなどを作製することは慣れたものです。東日本大震災のときは、3 大学が連携してそれぞれの強みや専門性を活かし、ボランティア活動を行うことができたのは良い経験でした。大学間連携することのメリットだと思います。

✤小林　なるほど。「TKK 3 大学連携プロジェクト」のお話は大学間連携の成果としてとても興味深いと思います。その点について、大学間のネットワークに関して、佐藤先生はどのように考えていらっしゃいますか。

写真 5.2.5 パネルディスカッションの様子

◆佐藤　そうですね。千代田区には「千代田区キャンパスコンソ」があります。今日は専修大学が中心で開催していますが、こういうイベントに他大学の学生や教職員が多く来れるような、そういうイベントの組み方が必要だと思います。それは千代田区にかぎる必要もないですが。先端的な取り組みやユニークな取り組み、新しい取り組みをしているところとか、先ほどの新宿の工学院大学の取り組みのように、いろいろな取り組みがあります。私が言及した青山学院大学の災害時対応のほかにも、熊本地震の際には、熊本学園大学は福祉避難所としてとても頑張って、障碍者の方を受けたりとか、いろいろな工夫をされています。いまは能登で、学生がさまざまな活動に従事していると思いますが、そこでどのように学び、自分たちをどのように活かせるかと考えるわけです。本学の場合、国際コミュニケーション学部もありますので、海外のいろんな取り組みを学んだり、交

流したりできるでしょう。日本はやっぱり災害大国と知られていますから、国際交流の枠組みで海外の人と話し合うというのも良いと思います。そういう意味では、防災をきっかけに大学連携の機会を作っていけると、皆さんのネットワークがより広がっていくと思います。

✤小林　たしかに言語や文化が異なっても地球上のどこでも災害は発生するという意味では、防災をきっかけとする国際交流は今後の大きな課題だといえます。

●廣井　村上先生と佐藤先生のお話を聞いてだいぶ頭が整理できました。たしかに村上先生がおっしゃるとおり、それぞれ大学の強みとか専門性が違うと思います。ただし、知識ではなくて、むしろ大学の思想や考え方というのはずいぶん違うと思うんです。たぶん、学生の皆さんも本学の建学の精神みたいなものを学ばされたと思いますが、他大学のそういうことって知らないですよね。そこで、ぜひ考え方を学び合ってほしいと思います。たとえば、安全とは何か、あるいは、学生生活をこれからどうするべきか、人生はどう生きるべきかのように、それらの思想の部分をきちんと皆さんのなかに確立するのが、とても重要な大学の 4 年間での仕事だと思います。知識は、いまではどこでも転がっているわけです。どちらかといえば、その根本的な考え方を学び合うことによって確立してほしいです。おそらくそれは、人生をこれから豊かに過ごすために、絶対的に、効果的に機能するはずです。10 年後、20 年後に、いわゆる思想の部分をきちんと共有し合った仲間と、もしかしたらどこかで再会するかもしれません。あるいは、困ったときに、若いときにいろいろ心を開いて議論した相手と相談する機会があるかもしれません。佐藤先生がおっしゃるように、ネットワークとしてそれを活かしていただきたいと思います。防災に関する細かい豆知識よりも、そっちのほうが学生の皆さんが学ぶ意味では重要かなと。それをうまく防災を使って皆さんでコミュニティをつくってほしいと思います。

◆佐藤　専修大学は「報恩奉仕」ですね。これはもう防災とバッチリとマッチします。

●廣井　そういうね、他の大学の建学の精神とか、そもそもの思想の考え方って知らないことが多いです。でもそれはとても重要なんですよ。

✤小林　ありがとうございました。非常に内容の濃い、さまざまなテーマや課題に結びついたパネルディスカッションになったと思います。本日は、廣井先生、村上先生、佐藤先生、そして、学生ボランティアの SKV の皆さん、今日はご参加ありがとうございました。議論のポイントとしては、イメージ力を鍛えるというところでしょうか。そして、大学が、つながる場、結びつける場、そして巻き込む場というような、私たちがすぐにでも取り組めるような課題が挙げられたと思います。本日の議論が今後の取り組みのヒントになれば幸いです。